

**認知症高齢者を介護する娘介護者の体験**  
 -介護生活の中で体験する困難と、介護生活の支えとなるもの-  
**Experience of daughter care giver who**  
**takes care of dementia elderly**  
 -Difficulty experienced in the daily life of care giving,  
 and things that can serve as an anchor to such daily life-

上山 千恵子<sup>(1)</sup>・田場 真理<sup>(2)</sup>・守本 とも子<sup>(2)</sup>  
 Chieko Kamiyama, Mari Taba, Tomoko Morimoto

#### 要旨 (Abstract)

本研究の目的は、認知症高齢者の娘介護者が体験する困難と、娘介護者にとって介護生活の支えとなっているものについて明らかにすることである。認知症高齢者である親の介護経験を有する娘介護者15名を対象に半構成的面接調査を行った。得られたデータは逐語録に起こした後、その中にあるテーマを記述し、共通するテーマを持つ者同士をグループ化した。その結果、娘介護者が体験する困難として「親の現状を受け止める難しさ」「役割の両立から生じる困難」「自分がやらなければ」「介護協力者との間に生じるずれ」「認知症の症状そのものへの対応の大変さ」「将来への不安」「娘であるがゆえに生じる理不尽さ」の7カテゴリーが、介護生活が続ける中で支えになるものとして「変わってゆく親を共有できる存在」「介護を分担してくれる家族」「距離をおく時間」「介護効果の実感」の4つのカテゴリーが見いだされた。娘介護者は、以前に介護の経験があったり認知症の知識を十分持っていたとしても、変わりゆく「親の現状を受け止める難しさ」を経験し苦しんでいた。そのような中で、親の現状を受け入れていくプロセスに、元気なころの親も、今現在の親の姿も共有できるきょうだいや、以前から知ってくれている医療機関が「変わってゆく親を共有できる存在」として大きな支えとなることが分かった。また、本研究結果からは、多くの役割を担い、その両立を迫られる立場にあって困難を感じている娘介護者の状況が明らかになった。このような娘の立場を理解した上での支援が重要であると考えた。

キーワード：(認知症) (高齢者) (娘介護)

#### I. はじめに

総務省の推計によると、平成27年9月現在、高齢化の指標とされる65歳以上の高齢者人口は3384万人となり、総人口に占める割合は26.7%に上る。前年と比べると、89万人、0.8ポイント増と大きく増加を示しており、人口、割合とも過去最高となっている<sup>1)</sup>。このような高齢化の進行とともに、介護が必要な高齢者が予測を超えるスピード

<sup>(1)</sup> 元・奈良学園大学保健医療学部

<sup>(2)</sup> 奈良学園大学保健医療学部

で急増している。介護保険制度における要介護者又は要支援者と認定された人は、平成24年度末で561.1万人となっており、平成13年度末と比較すると262.8万人増加している<sup>2)</sup>。

こういった要介護高齢者の急増に対して、わが国では、2000年に介護保険制度が実施された。在宅での介護場面で、家族以外の介護サービスが以前に比べると簡単な手続きで受けられるようになるなど、高齢者に対する介護サービスの仕組みが大きく変わったといえる。しかしながら、予想を超える要介護者の増加、核家族、少子化がさらに進む中、未だ様々な問題が残されている。

その中でも、認知症高齢者の介護は負担が大きいといわれる。高齢化の進行とともに、認知症患者の数も増加し、平成24年現在認知症患者数は462万人、平成37年（2025年）には約700万人となると予想されている<sup>3)</sup>。認知症患者では、様々な精神神経症状に加えて、言語・感情・行動・人格においても変化や異常が見られる。これらの症状は複雑に絡み合い、その出現の仕方は個人差があり一様ではない。さらに、個々人にあっても、その症状の変動は大きい。そのため適切な介護認定が難しく、症状にあった十分なサービスの利用が困難なケースもしばしば見られる。このような状況で、介護にあたる家族の身体的・精神的な負担は非常に大きなものにならざるを得ない。認知症高齢者の家族介護について、これまで、在宅認知症高齢者の家族介護者の負担や<sup>4)5)</sup>、介護負担感の要因に関する調査<sup>6)</sup>の他、介護する家族の成長プロセスに注目したものや<sup>7)8)</sup>、家族への支援プログラムを検討したもの<sup>9)</sup>も見られる。

一方、介護を担っている家族の立場に着目すると、日本では、伝統的に夫方同居の生活スタイルがとられ、親の介護は息子の嫁が担うケースが大半であった。しかし、近代日本の家族スタイルの変化の影響をうけ、最近では娘による介護、また娘夫婦と同居した形で行われる介護へと変化が見られる。菊沢が行った研究<sup>10)</sup>においても、高年齢層に比較すると、若い女性層において妻方の親を介護する割合が増えていることが明らかとなっており、今後、娘が主たる介護者となるケースの増加が予測される。娘による介護は、気兼ねがなく、気心が知れた間柄で介護ができるという点で、介護負担は軽減されると考えられるかもしれない。しかし、幼いころからの親子関係の影響、現在の夫やその他の家族への気兼ね、実の子であるが故の親（認知症患者）の甘えや周囲からのプレッシャーなど、様々な関係性や思惑のなかで大きな負担を抱えこんでしまう状況でもある。娘介護者には「嫁」や「妻」とは別種の、悩み多い介護生活が降りかかってくると春日も指摘している<sup>11)</sup>。また、菊澤<sup>12)</sup>の調査結果をみると、妻・夫・息子・嫁などに比べると実娘の場合には介護協力者がある割合が少ないこと、訪問介護やショートステイ利用しているケースも他続柄の介護者に比べると娘介護者では低い位置を占めていることが分かる。これらのことから、娘介護者では、親の介護状況において、他の協力を得ずに、自分自身で抱え込んでしまっている状況が多いことが考えられる。

これまで、認知症高齢者介護者の続柄に焦点をあてた研究には、続柄別あるいは性差別にみられる違いに焦点をあてた検討がされている<sup>13)</sup> また、妻や嫁介護者に焦点をあてたものも見られる<sup>14)15)</sup>。

そのような中、天谷ら<sup>16)</sup>は、認知症高齢者を介護する娘介護者を対象に調査を行い、娘介護者が直面した危機状況を明らかにしている。また、横瀬<sup>17)</sup>は、認知症発症から介護施設利用に至る心理プロセスを検証した。その結果、介護開始から入所後の見守りに至る娘介護者の心理カテゴリーとして〈当惑〉〈受容〉〈孤独〉〈疲弊〉〈自己矛盾〉など12カテゴリーを見出し、それらに時系列順序性があることを示した。これらの研究では、母の介護が期待され委ねられた娘は、閉塞状況のなかで苦悩や葛藤を募らせていることも明らかにされた。しかしながら、娘介護者に焦点をあてた研究は未だ数少なく、引き続き研究の積み重ねが必要と考える。そこで本研究では、認知症高齢者の介護をする娘介護者が体験する困難な状況を明らかにするとともに、そのような娘介護者が介護を継続する中で支

えとなっていることはどのようなことなのかについて明らかにすることを目的とする。これらについて明らかにすることは、今後増加するであろう娘介護者に対する支援のあり方について示唆を与えると考える。

## II. 研究方法

1. 研究デザイン：本研究では、認知症の親を介護する娘の体験に焦点をあてている。これは、その時々背景や状況に深く関連しており、それらを含めてデータの収集と分析を行い、その特徴を明らかにしていく必要があると考え、質的記述的研究方法を選択した。
2. 対象者とその選定：対象者は認知症高齢者の主たる介護者である娘介護者とした。奈良県内で研究への協力が得られた診療所1か所、在宅介護支援センター3か所において、認知症高齢者の主たる介護者である娘介護者の紹介を依頼した。紹介を受けた娘介護者のうち、本研究の概要と具体的な協力内容を説明した上で、研究参加の同意が得られた15名を本研究の対象者とした。
3. データ収集期間：2015年7月～11月。
4. データ収集方法：対象となる娘介護者に対して1回ずつの半構造化面接調査を実施した。面接時間は、16分から122分、平均44分であった。あらかじめ対象者の希望を確認し、対象者の自宅や診療所の1室で面接を行った。面接の中では、娘介護者が認知症高齢者である実親を介護する中で体験した困難や、困難が軽減された体験、介護生活の支えとなっていることなどについてたずね、関連する事柄について自由に語ってもらった。
5. データ分析方法  
得られたインタビュー内容を逐語録におこし、認知症高齢者である親を介護する中で経験した困難さ・苦悩、介護を継続する中で支えとなることに関連した内容を抜き出し、その意味内容が損なわれないようにコード化した。さらに、類似したコードをグループ化し、その中心的意味を抽出した後に、グループ間に見られる関連性を検討してカテゴリーを見いだした。なお、分析は3名の研究者で行い、合意が得られるまで討議を重ねることで信頼性と妥当性の確保に努めた。
6. 倫理的配慮  
奈良学園大学倫理委員会（承認番号27-005）で承認を得て実施した。対象者へは、研究の趣旨と方法、研究の参は自由であり承諾後の途中辞退も可能であること、匿名性の保持、研究成果の発表について書面と口頭で説明を行い、書面にて同意を得た。なお対象者選出に当たっては、研究者が事前に対象候補者の情報を得ることなく候補者を選出するために、あらかじめ協力施設の責任者から対象候補者に対して、研究についての詳しい説明を受ける意思があるかどうかを確認してもらった。その上で説明を聞く意思があることが確認できた対象候補者に、研究者自身が上記について説明を行った。

## III. 結果

### 1. 対象者の背景

対象となった娘介護者は15名（表1）であった。平均介護年数は4.9年であった。娘介護者からみた被介護者の続柄は、父親が6名、母親が9名であった。

表1 対象者の背景

娘	年 齢	要 介 護 者	親 の 年 齢	同 居 の 有 無	介 護 協 力 者 (人 数)	同 (人 数) 胞	介 護 期 間 (年)	要 介 護 度	認知症の症状	利用サービス
A	50歳代	母	78	別居	父	弟	1	2	感情表現の変化・実行機能障害	訪問看護・デイサービス
B	50歳代	母	93	同居	夫・姉・娘	姉	8	1	記憶障害・理解判断力障害	デイサービス
C	70歳代	母	死去	同居	兄	兄・妹	7	2	記憶障害・理解判断力障害	デイサービス・ショートステイ・入所施設
D	60歳代	母	93	同居	なし	弟	8	2	記憶障害	デイサービス
E	40歳代	母	82	別居	父	なし	0.5	3	見当識障害	デイサービス・ショートステイ
F	70歳代	母	94	同居	妹	妹(3)	16	3	記憶障害・実行機能障害	デイサービス・往診
G	50歳代	父	84	同居	母・妹	妹	1	3	記憶障害	訪問リハ
H	70歳代	母	95	同居	夫・娘	妹	4	4	記憶障害・実行機能障害	デイサービス・ショートステイ
I	70歳代	父	95	同居	なし	弟	3	4	記憶障害・見当識障害・実行機能障害・理解判断力障害	ショートステイ・訪問ヘルパー
J	70歳代	母	95	別居	妹	妹・弟	2.5	1	実行行動障害・判断力障害	訪問介護・訪問看護・デイサービス
K	70歳代	母	93	同居	弟、妹(2)	弟・妹(2)	13	3	記憶障害・実行機能障害・見当識障害	訪問リハ・往診
L	50歳代	父	83	別居	妹	妹・弟	4	2	実行行動障害	訪問リハ・訪問ヘルパー・訪問看
M	50歳代	父	81	同居	母	兄	2	3	理解判断力低下	訪問リハ・通所リハ・ショートステイ
N	50歳代	父	92	同居	母	兄	1.5	5	記憶障害・実行機能障害	ショートステイ
O	50歳代	父	92	別居	姉	姉	2	1	記憶障害・見当識障害	デイサービス

(\*既に亡くなっている親の年齢は、死亡時の年齢とした)

## 2. 認知症高齢者の主介護者である娘が体験する困難

15名のインタビューより得られたデータをもとに、認知症高齢者の主介護者である娘が介護する中で体験する困難の内容に注目して分析した結果、7カテゴリーが見いだされた。以下、見いだされたカテゴリーについて説明する。本文中においては、カテゴリーを《》、サブカテゴリーを〈〉、対象者による実際の語りを「ゴシック斜体」で示した。

表2 在宅認知症高齢者の主介護者である娘が体験する困難さ

親の現状を受け止める難しさ	義父母と違って割り切れない 仕事と違って割り切れない 頭で理解しても無理 関係性の逆転 言い過ぎでは自己嫌悪
役割の両立から生じる困難	家族に支障がでないよう神経を使う 介護VS自分の家族 夫や嫁ぎ先への罪悪感 実親への罪悪感
自分がやらなければ	他の人には頼めない 娘としての義務と責任 一番の理解者としての自負 周囲のプレッシャー
介護協力者との間に生じるずれ	きょうだい間での意見の食い違い 親(介護協力者)との意見の食い違い 介護協力者に対して抱く期待と現実の不一致
認知症の症状そのものへの対応の大変さ	説明しても分かってもらえないの繰り返し 「片付けられない」ことへの対応 感情的になる親への対応 24時間続く介護
将来への不安	介護力低下への不安 ダブル介護への不安
娘であるがゆえに生じる理不尽さ	介護をして当たり前という見方 介護役割に反映された伝統的な性差の見方 介護しても母は支配的

## 1) 《親の現状を受け止める難しさ》

認知症による様々な症状を呈し変化した、あるいは変化しつつある実親の現状を受け止める難しさに直面している状況である。〈義父母と違って割り切れない〉〈仕事と違って割り切れない〉〈頭で理解しても無理〉〈関係性の逆転〉〈言いすぎでは自己嫌悪〉の5つのサブカテゴリーから成る。

対象者は、義父母や仕事上で関わっている要介護者と比較して、実親の場合の受け止めの難しさを実感していた。また、同じ肉親であっても、もともと衰えていた祖父母を介護する場合とは違い、これまで自分を養育し、権力を持つ立場であった親が衰え、現在では親と自分との関係性が逆転する状況が、とくに受け入れることを難しくしていることが語られた。娘介護者は今の状況を受け止めなければならない、ということも頭では十分理解しながらも、実際にはとても困難である状況であった。また受け止めることができない自分を責めたり自己嫌悪する状況が語られていた。

「主人の父って、やっぱり他人だって思える…割り切れたところがあって…患者さんを介護しているって感じで思えた。(しかし実親の場合は) もっとしっかりしてたでしょ、みたいなイメージが自分の中である。…認めたくないのかな。」 B：母介護

「親っていう存在が、立場が逆転するわけじゃないですか。頭ではわかるけど、じゃあ全面的に受け入れてできるのって言われると難しくて。やっぱり実の親だからこそ、何でって思う気持ちがすごく強い」 G：父介護  
介護士の仕事をしているMさんは、認知症高齢者に対する望ましい対応の仕方を十分心得ていながら、自分の親の介護場面ではそれができない自分に対して、忍耐が足りないと話した。

「(自分は) 忍耐が足りない、聞いてあげることをしないと。間違っても受け入れてあげることができないと自分で反省。後から反省するんです。」 M：父介護

## 2) 《役割の両立から生じる困難》

実親に対しては、介護を担っている娘という立場ではあるけれども、婚姻によって自分が築いた家庭には夫や子供がいる。また、夫の両親に対しては、嫁という役割も果たさなければならない。このように、娘介護者という役割を担うと同時に、他方では母の役割、妻の役割、嫁の役割をも担っている状況であり、その中で、他の家族メンバーに迷惑をかけないように気を遣いつつ、また親の介護とどちらを優先させるのかと葛藤し、他家族メンバーに負担をかけてしまっていることに対して罪悪感を抱いている状況である。〈家族に支障がでないよう神経を使う〉〈介護VS自分の家族〉〈夫や嫁ぎ先への罪悪感〉〈実親への罪悪感〉の4つのサブカテゴリーから成る。

「行き来するのがしんどかったら、もう実家に泊まればいいじゃないって言われるんですけど、やっぱり家も気になるし、子どももいてるし、うちまで帰りたい…(しかし) 父を最優先にしないといけない…どっちで取れない。」 O：父介護

たとえ家族や親から責められたり、関係性が悪化している状況ではなく、現在は良好な関係を築いていたとしても、娘介護者は心を痛めていた。

「(正月に夫の実家に帰省中) 母を自宅に連れて帰ったから帰ってこいって(父に) 言われた…夫も夫の両親も帰ってほしくない、だけど早く送り出してくれたんですけど。でも本当はこっちに残ってほしいというのが私にも分かる。だから難しい。」 E：母介護

また、Jさんは、認知症の進行とともに親を一人だけで住まわせていることに無理があると感じながらも、自分自身は同居できない状況にあった。そばにいるべきであると感じながらも、それができない状況で、母親に対して

罪悪感を感じていた。

「(妹夫婦が)一緒に住んでくれるのが無理になった。いつまでこうやって(一人暮らしをさせておくのか)、心配ですけど。こんなことして(母をひとり暮らしさせている状況)いいのかなあとか思いながら。」 J : 母介護

### 3) 《自分がやらなければ》

他の家族や他人に任せることはせずに自分がやらなければならないと自分を追い込む強い思いである。〈他の人には頼めない〉〈娘としての義務と責任〉〈一番の理解者としての自負〉〈周囲のプレッシャー〉の4つのサブカテゴリーから成る。

娘介護者は、できるだけ自分の家族には介護のために手を煩わせたくないと感じており、特に自分の子供(要介護者である親からみると孫)には、介護をさせたくないと考えていた。実際に、子供は介護に参加していても、留守中の見守り程度であった。そのような状況で、たとえ疲弊している中でも自分がしなければという強い義務感と使命感を感じるとともに、それがプレッシャーともなっていた。周囲からの、ねぎらいや支持する言葉であっても、娘介護者にとってプレッシャーとなっている状況もあった。

「(娘の協力は)でも共有したくないっていうか、したらかわいそうって変な言い方なのかな、…強制するのはちょっとやっぱりどうなのかなと思って言えない。」 O : 父介護

「前に風邪をひいて熱出て、でもとにかくどうしても行かないと仕方がない、それはつらかった、…もちろんお隣も知り合いやし、言えば頼める。(しかし)それは最終手段…しんどいけど何とかなごりごりのところやったら、もう自分が行かんとどうにもならない。」 O : 父介護

また、親のことを一番分かっているのは自分であるという自負から、他の人には任せられない、細かな親の変化は自分でなければ分からないという思いもあり、サービス利用中でも常に気にかかっており、そのことが娘介護者の負担となっている状況があった。

「(ショートステイ利用中も)ちょっと見に行かないと心配な、意識レベルが落ちてるっていうのが家族でないちょっとわかりにくいようなところもあるんじゃないかなと思ってて。それをちょっと見には行かないと。」 N : 父介護

### 4) 《介護協力者との間に生じるずれ》

実親を介護している中では、家族(親・きょうだい)間に介護についての考えの不一致が生じる場合がある。そのことによって感じる苦痛。〈きょうだい間での食い違い〉〈親(介護協力者)との食い違い〉〈介護協力者への期待と現実の不一致〉の3つのサブカテゴリーから成る。

主介護者である自分がやっていた介護量以上のことを他のきょうだいに求められる場合、自分がきょうだいや親に対してさらによい介護を望む場合、療養の場所のについて意見が分かれるなどの不一致があったが、どの場合にも娘介護者は心を悩ませている状況が明らかになった。

「姉はやっぱりショート(ショートステイ)には行かせたくない…父も家が好きやし、家におりたいって言うから、それでいいやんかって言うんですけど、(主介護者の)私はやっぱり自分の生活としてはしんどい、ショート利用もしたい…そこが今、私の中ではしんどい。」 O : 父介護

介護士の仕事をしており仕事上でも認知症高齢者とかかわることが多いAさんは、介護協力者である父に期待す

る母への対応と現実のギャップの中で感じるジレンマについて次のように語った。

「父の方はやっぱり全く一般の者なので、実際に自分の身におきかえてどうしていったらいいんや（認知症への対応）っていうのをまだもう一つピンときてない…私が（認知症への対応として）自然と思っていることが、父には分からない、そういうジレンマっていうか…歯がゆい。」 A：母介護

#### 5) <認知症の症状そのものへの対応の大変さ>

認知症による、記憶力の低下、理解・判断力の低下、実行機能障害などの症状を呈した親の対応そのものについて感じる大変さである。<説明しても分かってもらえないの繰り返し><「片付けられない」ことへの対応><感情的になる親への対応><24時間続く介護>の4つのサブカテゴリーから成る。

「片づけても片づけても、椅子にのって天袋からものを出したりね。（私が）いないときに何でも引っ張り出しては中を開けて。それで、出したら最後しまわないので、もう何回も片づけ。」 J：母介護

同居している場合には、それは24時間続くことでもあり、昼夜関係なく続く介護生活に対して感じることであった。

「夜にすごく起きてトイレ。今寝たと思ったらまた行って、やっぱり足元が危ないからついて行きますでしょ連れてって待ってて。寝たと思ったらまた起き上がって、うわ、また行くの？って…」 N：父介護

#### 6) <将来への不安>

現在は何とか親の介護を続けることができているが、いつまで続くか分からない介護をどこまで自分ができるのか、また、家族内の状況が変わった時に介護を続けることができるかと、今後の将来に対して抱く不安である。<介護力低下への不安><ダブル介護への不安>の2つのサブカテゴリーから成る。

介護者自身も向老期にさしかかっており、自分や介護協力者であるきょうだいの介護力が低下した時や、夫の両親にも介護が必要になりダブル介護になった時のことを考えて、不安を抱えながら介護を行っている状況があった。

「一番不安なのは、いつまで続くやろういうの。…今のところ、きょうだいみんな健康やから、見える状況やけど、その辺がちょっとどこか崩れたら（どうなるか不安）。」 K：母介護

「夫、長男なので将来的に、夫の両親が介護まで行かなくても病気になったり何かになった時に。この母の状態とを…立場としては両方やらないといけない。今後に対する不安。」 E：母介護

#### 7) <娘であるがゆえに生じる理不尽さ>

懸命に親の介護をしても、それは娘として当然と見られたり、感謝されることもない状況に対して感じる理不尽さである。<介護をして当たり前という見方><介護役割に反映された伝統的な性差の見方><介護しても母は支配的>の3つのサブカテゴリーから成る。

実親でなく、嫁として義父母の介護をした際には感謝された体験がありそれと比較して考えている対象者もいた。また、親の立場からは、娘は介護をして当然という思いがある一方で、息子には介護をさせることを考えなかったり、介護に加わっている息子には感謝を示しているとも感じていた。これらのことによって、娘介護者は、介護上の役割と期待には性差があると感じ、不満を抱いていた。

「損やなという面は、（一緒に住んで介護していることを）母がそれは当然やみたいと思ってる…（弟には）ご苦労さんって言うけど、私に対してはそんなこと全然言うたことない。」 K：母介護

Nさんには、もともと両親と同居していて現在は最近定年を迎えた兄がいた。兄も介護に加わってほしいと考えていたが、母は男の兄に介護をさせようとせず、結果として現在介護に加わっていない状況に理不尽さを感じていた。

「やっぱ昔の、母にしたら兄がおしめを替えるっていうのは考えられないみたいで、男の子が。そういう意識はあるみたい…兄が土日うちに来て父の世話を全部するっていうことは考えられない…（でも私としては）介護してる男の人はいっぱいいるんやから、（兄にも）ヘルパーの勉強をやって（介護に加わって欲しい）。」N：父介護

### 3. 介護を体験する娘介護者の支えとなるもの

これまでに述べたような介護上の困難を体験している娘介護者であったが、その介護生活の支えとなっているものについて、対象者の語りからは4つのカテゴリーが抽出された。以下、見いだされたカテゴリーについて説明する。本文中においては、カテゴリーを《 》、サブカテゴリーを〈 〉、対象者による実際の語りを「ゴシック斜体」で示した。

表3 娘介護者の支えとなるもの

変わっていく親を共有できる存在	昔も現状も共有できるきょうだい 父のことを知ってくれている母 昔から知ってくれている医療機関
介護を分担してくれる家族	きょうだい間の介護体制 夫の協力
距離をおく時間	ショートステイ中は割り切れる 自分のための時間
介護効果の実感	親の笑顔 感謝の言葉

#### 1) 《変わっていく親を共有できる存在》

このカテゴリーは、〈昔も現状も共有できるきょうだい〉〈父のことを知ってくれている母〉〈昔から知ってくれている医療機関〉の3つのサブカテゴリーから成る。

認知症の進行とともに以前とは変わっていく親を受け止めることに困難を感じていた娘介護者であったが、元気だったころの親、現在の親の両方を知ってくれるきょうだいや親の存在が非常に助けになっていた。これらの存在は、物理的な困難というよりは、精神的な辛さを緩和してくれていた。変化した親の現状を受け入れる作業をともにしてくれる存在でもあり、また自分の大変さを理解してくれる、介護について相談できる存在であった。

友人に話して共感してもらえることで気持ちが楽になると語った対象者もいたが、一方では、実際の親のことを知らない友人に話しても細かいリアルな部分までは伝わらないと考える対象者もあり、もともとの親、そして今の親の状況も共有できる家族の存在が重視されていた。

「妹と『いろいろしてもらったもんねえ』ゆうてね。そしたらね…ちょっと涙出てくるけど（笑）、大丈夫。…今度妹来たとき、昔の母のアルバムを整理して額に入れようって言ってる…それが一番の救い。」F：母介護

「母がいますので、そういう全く同じことが共有できますよね、父のことに関して。だから救われてる。友達なんかは、うちの父の、私が話すことしか分からない、直接会ってはないのでね。母とは、あんなことしてたよ、とかいうので話ができる部分があり、一番楽かな。」M：父介護

また、上記の家族ようなメンバーだけでなく、そのような医療機関も必要と感じていた。医療機関については、

以前からの親のことを分かった施設でなければ受け入れてもらえなかったかも知れない、との思いを抱いている対象者もいた。

「知ってくださってるからこそ、していただいていると思うし、それがなかったら、もっとしんどかった…通常の医療機関に頼んでも、こんなややこしい人だったら、断られる可能性が大きい…たらい回しにされてたような患者だとは思えます。」 L：父介護

## 2) 《介護を分担してくれる家族》

このカテゴリーは、〈きょうだい間の介護体制〉〈夫の協力〉の2つのサブカテゴリーから成る。

介護をする上で、特に物理的な困難に対しては、交代で介護してくれるきょうだいや夫の協力が助けとなっていた。介護を分担してくれる家族メンバーとしては、きょうだいが一番多く語られ、続いて夫、母であった。子供（介護者からみると孫）を、介護分担してくれる家族として語られることはほとんどなかった。

きょうだい間の協力体制があったら在宅介護は困難であったと考える者もあり、介護を分担してくれる家族メンバーの中でも、きょうだい達の存在が重要な役割を果たしていることが語られた。

「(きょうだいの存在が) 全然大きい…本当に動けないときとかあるんです。(そんな時) 何時までやったら動けるから、それから交代してくれたらとりあえず朝までは行けるわとか(妹が) 言ってくれるから、そしたら私も段取り、仕事の手配して、交代したり。」 L：父介護

なかでも、特に女きょうだいの存在が助かると語った対象者おり、実際に介護協力者として挙げられたのはほとんど女きょうだいであった。男きょうだいもいるがほとんど介護には加わっておらず、女きょうだいだけで介護を分担している状況があったり、兄と二人きょうだいのNさんは、次のように語った。

「そら、娘一人なんで、もう1人姉とかがいたらよかったのとか…物理的にしんどいことはいっぱいあるから、もう1人姉でも妹でもいたらと思う、物理的なそんなんはある。」 N：父介護

このように、介護分担者としてのきょうだいという意味では、女きょうだいと男きょうだいとで違いが見られた。

## 3) 《距離をおく時間》

このカテゴリーは、〈ショートステイ中は割り切れる〉〈自分のための時間〉の2つのサブカテゴリーから成る。

介護をする中で、時には親から離れて過ごす時間が娘介護者の救いになっていることが語られた。父の介護場面では、やっきになって対処してしまう、深入りしてしまう状況を語ったIは、自分の目の届かないところ、自分が手出しできないところに親がいるという物理的距離をとることで、あきらめもついて割り切ることができていた。

「ショート(ショートステイ)に行くようになって、やっと割り切りができるようになりました。預けてる間は、食べなかるうと、べちゃべちゃになってようと、しょうがないと…見てないから。」 I：父介護

介護から離れた時間で、自分のやりたいこと(趣味など)をすることは気晴らしとなっており、介護による苦痛が和らいでいた。

「(以前あったのは) 私のいらいらですよ。何にもできないとか、いろいろと。だけどもう、今はないですね。…私も好きなことをしてますからね。お稽古、レッスンをしてますから。」 F：母介護

## 4) 《介護効果の実感》

このカテゴリーは、〈親の笑顔〉〈感謝の言葉〉の2つのサブカテゴリーから成る。

困難の多い介護生活ではあるが、その中でも自分が介護することによって見せてくれる親の笑顔や、親からの感謝の言葉などが心の支えになっている状況が語られた。見返りを求めて行っているわけではなくても、介護をしている親の喜ぶ姿や、感謝の言葉が、娘介護者にとって素直に嬉しい気持ちと安心感をもたらしていた。

「やっぱり母が元気でにこにこしてくれてると、今日はでも、送り出しっていうんですか、するときに、朝早くからごめんねとか言ってくれたりしたら、ほっとして。」J：母介護

#### IV. 考察

本研究において対象となった娘介護者の語りを分析した結果、認知症高齢者の介護をする娘が体験する困難として7つのカテゴリーが、また介護をする娘が支えになっていると感じているものとして4つのカテゴリーが見いだされた。一般的に、認知症患者の介護においては、日常の介護全般とともに特有の精神症状や行動障害への対応が必要であり、介護者には大きな負担がかかるといわれている。本研究においても、対象者からは、感情的になる親への対応の難しさ、昼夜関係なく、また自分の体調に関係なく続けなければならないなど、介護生活そのものについての大変さが語られた。それらに加えて、今回の結果からは、娘介護者が親との関係の中で生じる困難さ、周囲との関係のなかで生じる困難さという特徴が表れていた。本研究の結果を踏まえて、このような困難さが生じる背景と必要とされる支援の在り方について考察する。

##### 1. 親との関係の中で生じる困難さについて

今回対象となった娘介護者からは、現在の親の状況を受け入れることの難しさが語られた。認知症の介護において大切なことの一つとして、病気を受け入れることであるということは、ごく一般的であるといえる<sup>18)</sup>。本研究の対象者のうち3名は介護や看護の職種についており、仕事上で認知症の高齢者をかかわる機会もあった。また、これまでに祖父母、義父母の介護を経験した対象者もあり、認知症患者に接する上での一般的な知識は心得ていたと考えられる。しかし、そのような娘介護者であっても、自分の親の場合には、変わりゆく姿をありのままに受容していくことは困難な状況であった。頭ではわかっている、自分の親にはもっとしっかりして欲しいとの気持ちからつい強く言いすぎてしまい、後になって後悔、自己嫌悪に陥る状況も語られた。山本<sup>18)</sup>は、被介護者を喪失するプロセスは介護経験の中で経験されはじめ、そのはじめには介護者、とくに被介護者に強い愛着をもつ娘介護者は強い喪失の念を抱く、と述べている。娘介護者には、親娘間にこれまで形成されてきた愛着、元気なころの父親や母親のイメージが影響を及ぼし、変化していく親の状況を受容していくことがそう簡単ではなかったと考えられる。

ただ、今回そのような中でも、親（要介護者の配偶者）やきょうだいの存在がこの受容過程において大きな支えとなっていることが分かった。親（要介護者の配偶者）やきょうだいは、元気なころの父親（母親）も、加齢や認知症によって変わっていく父親（母親）の姿も共有できる存在であった。そして、喪失感やつらい感情はありながらも、それを受け入れていくというプロセスを共有し、ともに歩んでくれる存在であり、娘介護者にとっては大きな存在であったと考えられる。対象者は、介護者であると同時に、要介護者の娘でもある。娘介護者らの語りには、きょうだいとともに自分達を育ててくれた親の人生、また自分自身がその親の娘であることを振り返る姿が表れていた。同胞とともに、この親の子供であることの価値や意味を再確認しながら、現状を受容していくプロセスであったと考えられる。

しかし昨今の少子化傾向から考えると、今後は同胞の数は減少していく傾向にある。このように共同作業をしてくれるきょうだいが少ない、あるいはいないというケースも多くなると予想される。そのような中、変わっていく親を共有できる存在として＜昔から知ってくれている医療機関＞が挙げられたことは今回注目すべきであると

考える。娘介護者にとっては、昔からの親を知ってくれている医療機関のスタッフとは、変化した親の状況も含めて共有できる存在であり、そのことが娘に安心感を与えていた。現在我が国では、今後さらに進む高齢化、医療と介護の需要の増加を受けて地域包括システム構築の動きが進んでいる。そのような動きの中、認知症になってから特定の医療機関等にかかるという従来の在り方ではなく、健康なころから継続してかわりをもち、その人の昔も今も知っていて家族と共有できる医療機関やサポートシステムがあるということも、一つの重要な視点であると考ええる。

## 2. 周囲との関係の中で生じる困難さについて

本研究結果からは、多くの役割を担い、その両立を迫られる立場にあって困難を感じている娘介護者の状況が明らかになった。この状況は、結婚している娘に特徴的に見られた。結婚し、生産家族を築いた娘には、新しい家庭での役割が加わる。夫に対しては妻の役割、子供に対しては母の役割、そして夫の両親・親戚に対しては嫁の役割が生じる。仕事をしている場合には、職場での役割も加わるだろう。このような中で、娘介護者は、複数の役割を果たしながら、実親の介護役割も担っていた。しかし、全ての役割を完璧にこなすことは事実上非常に難しく、娘はどちらを優先させるかという葛藤を抱えている状況であった。嫁ぎ先や、家族に対しては、これまでのように関われなくなったり家を空けることに対して罪悪感を抱き、実親に対しては、そばで十分な介護ができないと自分を責めていた。

そもそも、日本における伝統的な捉え方においては、長男の嫁が親の介護をすることが一般的と捉えられてきた。一方で、娘は結婚した時点で実家を去り嫁ぎ先の家族メンバーとなるために、嫁と比較すると実親に対しての介護者としての役割期待はそれほど大きくなかったといえる。しかし、近年の家族形態の変化から、実娘が親の介護役割を担うケースが増えてきており<sup>20)</sup>、結果として、娘は嫁ぐことによって新しく生じた役割とともに実家の中で介護者としての役割を担うため、複数の役割の両立を迫られている状況となっていると考えられた。

また、実親の介護について、自分の夫や子供、嫁ぎ先にはできるだけ迷惑や負担をかけないように、自分の役割と完結しようとする姿勢が見られた。自分のきょうだい間で介護を分担することはあっても、夫や家族に分担を依頼することはほとんど見られなかった。自分の子供に対しては、特に介護への協力を仰ぐことはなく、介護をさせるのはかわいそうだから、と語った娘介護者もいた。これらのことが結果的に、介護負担を抱え込む結果となって、より娘介護者を追い詰めていたのではないかと考える。一方で今回、介護生活の支えとなるものとして介護者からは、介護を分担してくれる家族、距離をおく時間、介護効果の実感などが語られた。支援を行う専門家としては、娘介護者の前述のようなおかれた状況を理解したうえで、必要で適切な周囲からのサポートを娘介護者が受けられるように、娘介護者本人だけでなく、家族、親である要介護者に関わっていくことが重要であると考ええる。

## 3. 本研究の限界と今後の課題

本研究の対象者は15名であったが、診療所や在宅介護支援センターによる呼びかけに応じた娘介護者であり、介護に対して肯定的な印象をもっていた層であったと考えられる。また、介護を始めてからの期間が長いもので16年となっており、その間の出来事を振り返りながら語ったものでもあり、当時の体験をどの程度リアルに語られたものかは疑問が残る。今後は、さらに対象を広げた調査、縦断的な調査を行い、今後増加が予想される娘介護者への支援の在り方についての検討が必要であると考えられる。

## V. 結語

認知症高齢者の娘介護者が体験する困難と、介護生活を継続する上で支えとなるものについて明らかにするため

に、15名の娘介護者に対して半構成面接法による調査を行った。その結果、娘介護者が体験する困難として7カテゴリーが、娘介護者が介護継続する上で支えとなっているものとして4カテゴリーが明らかになった。娘介護者が、変わりゆく親の状況を受け止めるプロセスには、現在の状態だけでなく以前の元気だったころの状態もしており、共有できる存在が大きな支えとなっていることが明らかとなり、そのような存在として、親（要介護者の配偶者）、同胞、以前から関わりのある医療者が挙げられた。また、多くの役割を担い、その両立を迫られる立場にあり困難を感じている娘の姿も明らかになった。

## 謝辞

本研究を行うにあたり快く研究に協力してくださいました皆様に心より感謝申し上げます。

本研究は、平成27年度奈良学園大学共同研究費の助成を得て実施いたしました。

## 文献 (References)

- 1) 統計局ホームページ/平成27年/統計トピックスNo.90 統計からみた我が国の高齢者（65歳以上）-「敬老の日」にちなんで- 1. 高齢者の人口, 総務省統計局. <http://www.stat.go.jp/data/topics/topi901.htm>
- 2) 平成28年版高齢社会白書（全体版）, 第2節 高齢者の姿と取り巻く環境の現状と動向, 3 高齢者の健康・福祉, (2) 高齢者の介護, 内閣府. [http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2016/zenbun/pdf/1s2s\\_3\\_2.pdf](http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2016/zenbun/pdf/1s2s_3_2.pdf)
- 3) 平成28年版高齢社会白書（全体版）, 第2節 高齢者の姿と取り巻く環境の現状と動向, 3 高齢者の健康・福祉, (1) 高齢者の健康, 内閣府. [http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2016/zenbun/pdf/1s2s\\_3\\_1.pdf](http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2016/zenbun/pdf/1s2s_3_1.pdf)
- 4) 杉浦圭子、伊藤美樹子、三上洋他「家族介護者における在宅認知症高齢者の問題行動由来の介護負担の特性」『日本老年医学学会雑誌』44(6)、717-725、2007年、717-725頁
- 5) 緒方泰子、橋本廸生、乙坂佳代「在宅要介護高齢者を介護する家族の主観的介護負担」『日本公衆衛生学会誌』47(4)、2000年、307-319頁
- 6) 佐伯あゆみ、「認知症高齢者を介護する家族の家族機能および家族システムが介護者の介護負担感におよぼす影響」『日本赤十字九州国際看護大学』5、2006年、55-62頁
- 7) 諏訪さゆり、湯浅美千代、正木治恵他「痴呆性老人の家族看護の発展過程」『看護研究』29(3)、1996年、31-42頁
- 8) 田中（高橋）道子、赤城陽子、多久島寛孝他「認知症高齢者の家族看護に関する研究-家族看護の6段階の発展過程と社会的支援-」『保健科学研究誌』4、2007年、11-19頁
- 9) 工藤憲司、中村貴志、納戸美佐子他「デイケアにおける認知症家族介護者の「家族支援プログラム」の効果」『日本認知症ケア学会誌』8(3)、2009年、394-402頁
- 10) 菊澤佐江子「女性の介護：ライフコースからの考察」『福祉社会学研究』4、2007年、99-119頁
- 11) 春日キスヨ『介護とジェンダー』家族社、1997年、32頁
- 12) 菊澤佐江子、「ジェンダーと介護ストレス-高齢者介護の場合-」『家族関係学』30、2011年、179-187頁
- 13) 石垣和子、長谷川喜代美、松村幸子他「特別養護老人ホーム入所申請に至る間の介護者の思いとサービス利用-続柄別に見た特徴-」『日本老年看護学会誌』5(1)、2000年、115-123頁
- 14) 百瀬ちどり「認知症の夫を介護する妻の施設利用に至る体験の分析」『松本短期大学紀要』15、2006年、119-127頁

- 15) 渡辺千枝子「認知症高齢者を介護する嫁の介護意識の変容」『日本看護研究学会雑誌』31(4)、2008年、75-85頁
- 16) 天谷真奈美、大塚真理子、島田広美他「痴呆性高齢者を介護する娘介護者の危機」『埼玉県立大学紀要』4、2002年、87-93頁
- 17) 横瀬利枝子「介護施設利用に到プロセスへの一考察－認知症の母親と娘の関係性の視点から－」『生命倫理』19(1)、2009年、60-70頁
- 18) 高室成幸監修、『もう限界!! 認知症の家族を介護する時に読む本』自由国民社、2011年、128-129頁
- 19) 山本則子「痴呆老人の家族介護に関する研究 娘および嫁介護者における介護経験の意味 2. 価値と困難のパラドックス」『看護研究』28(4)、1995年、75頁
- 20) 前掲書11)、40頁